

真理の探究者たちへ…

想像力のシステムティックな活用が……将来、必須となるだろう。
知恵を増すだけでなく、カオスと虚無から情勢を守るために。

——オーウェン・バーフィールド

**DARK STAR RISING:
MAGICK AND POWER IN THE AGE OF TRUMP
by Gary Lachman**

Copyright © 2018 by Gary Lachman

All rights are reserved including the right of reproduction in whole or in part in any form. This edition published by arrangement with Tarcher Perigee, an imprint of Penguin Publishing Group, a division of Penguin Random House LLC through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo.

新世界「無」秩序

..... 11

「勝つのはわたしだ」

..... 29

・ポジティブシンキングの祖・ピール牧師 31

・「思いは現実化する」の系譜 34

・現実を創るのは心か、物質か？ 超越主義と観念論 36

・「成功」へのフォーカス 42

・想像力が肉体におよぼす驚異的パワー 44

・ニューソートの祖クインビーの奇跡的回復体験 46

・メスメリズムと近代催眠 49

・信念の力 52

・クリスチャン・サイエンスの勃興 53

第
2
章

- ・健康から幸福、そして豊かさへ 56

ポジティブ・カオス 63

- ・ピールのポジティブ・シンキング・セオリー 63
- ・ピールとニューソートの接点 66
- ・成功のためのピールの3ステップ——折り化／映像化／現実化 72
- ・ネヴィル・ゴダードと究極の実在「I AM」（私は在る） 73
- ・欲望／普遍精神／現実化 79
- ・ケイオス・マジックの先駆者たち 83
- ・1970年代以降の本格的ケイオス運動のはじまり 89
- ・いかにしてケイオス・マジックははたらくか 94

第
3
章

グルとデマゴーグ 98

- ・人間の根元的欲求とデマゴーグの誘惑 98

第
4
章

オルタナ右翼のいま

136

・カリスマ的リーダーとパワー 103

・デマゴーグたちの魔術的スペクタクル 106

・「ライトマン」の暴力性 109

・パワーの行使とセックス 113

・グルの暴虐性と支配 117

・なぜ信者たちはグルの独裁を受け入れるか 122

・やられたら100倍やり返せ！

——ライトマンとしてのトランプ 128

・トランプが発動する言葉の魔術 131

・トランプの大統領選挙とオルタナ右翼の台頭 136

・オルタナ右翼の父、スペンサーの白人至上主義 140

・トランプが生んだオルタナ右翼ミーム「カエルのぺ」 146

・インターネット空間とシンクロニシティ 149

・ポストモダン時代のトウルパ魔術 153

第
5
章

それが伝統

- ・オンラインで甦った古代エジプトの混沌神 158
- ・ステイプ・バノンのエンターテインメントの戦争 163
- ・バノンとブライトバートの邂逅 166
- ・オルタナ右翼と反移民パラノイア 170

- ・孤高のトラディショナルリスト、ユリウス・エヴォラ 173
- ・トラディショナルリズムの創始者、ルネ・ゲノン 178
- ・地底都市アガルタとシナルキー 180
- ・シュヴァレ・ド・リュビッツと反セム主義的オカルティズム 187
- ・トラディショナルリズムと反近代 192
- ・エヴォラの闘争的トラディショナルリズムと
現実創造の魔力 197
- ・エヴォラとファシズム 204
- ・戦後世代へのエヴォラの思想的影響 210

万人の万人に対する闘争……………213

- ・「存在」と「生成」の戦い 213
- ・ソヴィエト崩壊後のカオス 219
- ・新生ロシアのPRマン、スルコフ 220
- ・スルコフの現実劇場 225
- ・愛国青年団「ナーシ」 227
- ・ロシアのテレビ魔術師たち 229
- ・非線形のウクライナ紛争 232
- ・プーチンの地政学アドバイザー アレクサンドル・ドゥーギン 236
- ・反体制からネオナチ、オカルト極右への遍歴 239
- ・ファシズム・陰謀論・NBP 242
- ・ユーラシア主義 vs 大西洋主義 247
- ・ユーラシア主義の起源 251
- ・グミリヨフとソ連崩壊後のユーラシア復興 253

カオスの政治学

262

- ・大成功をおさめたユーラシア・ミーム 262
- ・2000年代における「ユーラシア」の焦点化 266
- ・ロシア千年王国と反近代・反個人・反平等 272
- ・「終末」の到来は近いのか? 278
- ・むすび 287

- ・あとがき 297
- ・謝辞 298
- ・監訳者解説 神の「見えざる手」 299
- ・本書関連年表 311
- ・原注 334
- ・図版出典一覧 336
- ・著者既刊一覧 337
- ・事項索引 340
- ・人名索引 343

ブックデザイン 坂川事務所
校正 麦秋アートセンター
編集協力 THE ARK COMPANY

序章 新世界「無」秩序

数年前、わたしは現代世界における「オカルト」もしくは「秘教」エソテリック思想の影響についての本を執筆した。オカルトは「隠されたもの」を、エソテリックは「内的なもの」を意味するが、通常はどちらの語も、わたしたちの標準的、合理的、科学的理解を超える現実の諸相のことを指す。よりくだけていえば「魔術的」とも呼べるだろう。一般的に主流の科学はこうした概念を「迷信だ」「馬鹿げている」と主張して、その誤りを暴こうとする。だが、これらの概念は、わたしがほかの著作で示そうとしたように、西洋の歴史・文化の誕生以前から影響を与えてきた「否定された知」という、ある種の対抗カウンター・トランディショナル伝統を形成してきた。⁽¹⁾

拙著『政治とオカルト』の論点のひとつは、「オカルト政治」は、いかなる形態であれ、政治的スペクトルの右翼側に際立って存在してきたという、ウンベルト・エーコなどの作家たちが推進してきたポピュラーな見方は実情とは異なるということだった。⁽²⁾「革新派」にもオカルト政治は存在し、歴史に影響を与えてきたという事実は探せばいくらかでもみつかる。例として、17世紀ドイツの薔薇十字団運動や、神智学者のヘレナ・ペトロヴナ・ブラヴァツキーとアーニー・ベサントがインドの英国統治からの独立におよぼした影響などをあげることができるだろう。

ブラヴァツキーはオカルトが政治に入りこむ際の悪評を示すよい例だ。人類と宇宙の歴史を壮大に描いた

秘教学の古典『シークレット・ドクトリン』の著者である彼女は、アーリア至上主義者らによる悪用によって、国民社会主義の不快極まる人種主義思想の源というレッテルを貼られている。その一方、マハトマ・ガンディーが受けた最も大きな影響のひとつは、まもなく死を迎えようとしていたブラヴァツキーとの対面であり、神智学者の友人たちからのヒンドゥー教聖典『バガヴァッド・ギーター』の紹介であったことはあまり言及されることがない。ブラヴァツキーを主題とした拙著で示したように、『ギーター』はガンディーの人生にとって最も大切な書となった。かれは自分にその本を教えてくれた神智学に死ぬまで感謝していた。暗殺のまさにその日も、ガンディーは自身の機関紙『ハリジャン』に、神智学に賛同する文章を書いている^③。このことだけでも、オカルト政治を右派だけに結びつける見方は不正確だということがうかがえるだろう。

いまでもわたしは、オカルトを自動的に右派に連結する見方は不適切であり、全体像のほんの半分しか提示できていないと考えている。だが本書では、『政治とオカルト』のときとはすこし論点を変えて、過去ではなく「現在」におけるオカルトと極右陣営とのつながりに焦点を当てる。オカルト政治を政治的スペクトルの極右側に即座におしつけるべきではないという議論からはずれて、こうした本が必要となったのはなぜか。それは、近年、オカルトの政治への再侵入が見受けられるが、大方の報告によれば、それは左派では求められていないようだからだ。

わたしがこう述べる理由については、つづくページにおいて、現代政治情勢への極右オカルティズムの新たな流入現象の証拠を示すことによってお伝えできれば幸いである。だが、このような展開を紹介するのに最適な方法は、どのようにしてわたしがそうした動きに遭遇したかを説明することだろう。それはこんちのほとんどのことがそうであるように、ソーシャルメディアを通じて起こった。

ある日の午後、ニューソート系プログラマーであるハーヴェイ・ビショップの投稿がフェイスブックで目に入った。ニューソートは「存じのように、多種多様な信条、哲学、実践の総称であり、その中心的テーマは、心は現実に対して直接的に影響を与えることができ、精神的努力のみで「ものごとを実現する」ことができる」というものである。20世紀初頭に現在のかたちとなったこの思想は、いくたびものリバイバルを経て、いまではニューエイジや霊的信仰の大きな柱のひとつとなっている。読者のなかにはロンダ・バーンのベストセラー書籍・映画『ザ・シークレット』によってニューソートを知った人もいるかもしれない。ニューソートは「メンタル・サイエンス」や「サイエンス・オブ・マインド」などの名前で、未来の現実を心に描いて実現するという、ヴィジュアライゼーションやクリエイトイブ・イマジネーションのメソッドを教えている。十分な意志、根気、コミットメントとともにイメージすれば、心に描いた未来が実現するとニューソートは主張する。

ビショップなどのニューソート実践者たちは、ニューソートのポジティブな側面やスピリチュアリティとのつながりを強調する。実際、かれらの主張で最も人気があるのは、「ポジティブ・シンキング（積極的思考）の力」——同名の非常に成功したニューソート書籍がある——を通じて、人は自身の目的を果たし、目標を達成し、全般的に満たされたよい人生を確かにできるといふものだ。しかし、ビショップの投稿はこうしたことではなく、それよりもずっとダークなものに関係していた。

2016年アメリカ合衆国大統領選挙では、大富豪ドナルド・トランプが勝利した。その余波として最も憂慮すべき事態のひとつが起こったのは、選挙直後、ホワイトハウスからそれほど遠くないロナルド・レーガン・ビルディングで開催されたナショナル・ポリシー・インスティテュート（NPI）の年次総会でのこ

とだった。「ナシヨナル・ポリシー・インステイテュート」とは一見、無害そうな名前に思えるが、多くの人はこれを白人ナシヨナリストの団体と考えている。⁽⁴⁾ 合衆国でも欧州でも、極右勢力にとっては、トランプの台頭はリベラルによる支配が終焉し、かれらに権力が回ってきた兆しとみなされた。トランプの選挙キャンペーン中、インターネットでは、ゆるやかなつながりをもつ新たな極右運動が発生した。NPI代表のリチャード・スペンサーは、それを「オルタナ右翼」(またはオルト・ライト)と名付け、それ以前の粗暴な類いの運動と差別化した。トランプの勝利に喜んだスペンサーは、NPIの総会で凍りつかせるような祝辞を述べたが、それに対する聴衆の反応はさらに不気味だった。スペンサーはこう熱弁をふるった。

「ハイル・トランプ(トランプ万歳)、わが国民万歳、われわれの勝利万歳！」

群衆は熱狂的な拍手喝采でこれに応え、ヒトラー式の敬礼をする人もすくなくなかった。もともと、スペンサーは後日、あれはローマ式の敬礼だと釈明した⁽⁵⁾。さらに衝撃的だったのは、スペンサーとかれの信奉者たちが、トランプの勝利をみずからの手柄としたことだった。スペンサーはそれを「意志の勝利」と呼び、「われわれはドナルド・トランプが政権の座につくことを望み、その夢を現実にしたのだ」と宣言した。⁽⁶⁾

ビショップが投稿で指摘したように、夢の現実化はニューソートの中心的目的である。ニューソートでは、熱烈な願望を意志を帯びた意図の力によって物質化する。ビショップは投稿のなかで次のような懸念を表明した。スペンサーやかれの信奉者たちは、ニューソート書の一部分を抜きとり、「ポジティブ・シンキングのパワー」をビショップやおおかたの人が考えるところの「あまりポジティブではないもの」に変えてしまったのではないだろうか？

スペンサーやオルタナ右翼の人びとがトランプの大統領就任を実際にどのように「夢みた」か——仮にか

れらが本当にそうしたのであれば——についてはのちほど検討をおこなう。ここでは「ミーム・マジック」として知られるものの関連を指摘しておこう。「ミーム」(meme)は生物学者リチャード・ドーキンス博士による用語で「利己的遺伝子」として知られている。ドーキンス博士は、ミームは遺伝子が体内器官で果たすのと同じ機能を文化において果たすと論じた。ミームとは、発想、態度、形式、イメージ、シンボル、スローガンなど、他者に伝達し、他者がそれを模倣できる文化的展開のことである。ミームは柔軟性に富み、伝達過程で影響を受けやすい。これは、伝言ゲームや電話ゲームと同じで、メッセージが人から人へと伝言されていくにしたがって、歪められ、最終的に当初とまったくちがうものになってしまいうのに近い。1989年にドーキンス博士がはじめてこの言葉をつくったとき、ミームを拡散する主なメディアは、書籍、アート、音楽、テレビ、映画など、旧世代のものだった。こんにちでは、ミームはインターネットをとおして広がり、むしろ「コンピュータ・ウイルス」という生物学的概念に近いものとなっている。

ミーム・マジックの「マジック」は、「ケイオス・マジック」(chaos magic、混沌魔術)として知られるものとの関わりに由来する。ケイオス・マジックは、20世紀で最も有名な魔術師、アレクスター・クロウリーが好んだ呪文を取りいれた魔術であり、詳細についてはのちほど解説する。ここでは、伝統的魔術の呪文、魔術書、儀式、祭典、シンボルにこだわるよりも、DIY的でクリエイティブなアプローチをケイオス・マジックが好むことを指摘しておく。臨機応変な対応を可能とする魔術師個人の自主性や想像力、能力といったものを好むのだ。杖や鐘や香を広げたり、鬼神の名前を正しく唱えたりというよりも、ケイオス・マジシャンたちは手元にあるものは何でも使う。すなわち、こんにちのケイオス・マジシャンたちの用いる術具は、インターネット上にはびこる「ミーム」なのである。

ケイオス・マジシャンやほかの多くの現代オカルティストたちにとって、インターネットは、伝統的魔術

師にとつての「アストラル界」(幽界)と同じ役割を果たす。望んだ意図を伝達するサイキックな媒体のようなイメーজだ。ミーム・マジックは、インターネット上で生まれたものが「現実世界」に流出し、現実界を変化させるときに起こる。実際、それは誘発された「シンクロニシティ」のようなものだ。「シンクロニシティ」とは、心理学者のC・G・ユングによる「意味のある偶然」を意味する言葉で、わたしたちの内的世界で起こったことが明確な因果関係なしに外的世界でも起こる現象を指している。上記の「内的世界」の部分に「インターネット」を当てはめれば、つながりがみえてくるだろう。

トランプがホワイトハウスの座につくことを意図し、夢みたオルタナ右翼の「魔術師たち」にとつてのミームは「カエルのペペ」だった。少々混乱させてしまったかもしれないが、本書で検討する魔術はいずれにせよケイオス⇨カオス(混沌)に関係するものである。

もし、これらすべてのことが、トランプ勝利の興奮のなかでポジティブ・シンキングのパワーに舞い上がった少数人数の熱狂的極右たちに限られるなら、「地球平面説」や「月面着陸フェイク説」などと同様に、安心して一部の狂信者による陰謀論として片付けることができる。しかし、それでは物語のキーを取りこぼしてしまう。スペンサーやその仲間たちがみずからの意志の力で政権に送りこんだと信じる大統領は、すでに述べたようにドナルド・トランプなのだ。

トランプ自身が陰謀論の熱心な信奉者・推進者であることは周知の事実だ。「バーサー^(*)説」を擁護し、「ケムトレイル^(*)」やそれと同じくらい疑わしい数々の諸説も容認している。また、トランプが「ポジティブ・シンキング」の愛好者であることも明らかにしている。トランプ自身が述べたように、かれは「ポジティブ・シンキング」という言葉を有名にしたノーマン・ヴィンセント・ピール牧師の「よき生徒」であった。

前述のピール牧師の著書『積極的考え方の力』は、1952年の刊行直後から大ヒットし、人生の成功法を伝える書籍にふさわしい結果をおさめた。トランプはピール牧師から、「心によっていかなる障害も克服できる」という大いなる秘密を学んだ。オルタナ右翼たちがボジティブ・シンキングの力をおして「意志の力で」政権に送った大統領は、自身も大いにその力を活用しているようだ。

だが、この奇妙な展開においてさらに奇妙なのは、トランプ自身が「天然の」ケイオス・マジシャンのように思えることだ。

選挙中、さらには大統領就任後の最初の数カ月でより明らかになったことだが、トランプはほかの政治家たちのようには動かない。多くの人が、これこそトランプが有権者たちを魅了した理由だという。ヒラリー・クリントンのホワイトハウスへの出馬に反対する人びとは、彼女が大統領になっても「いつもと同じ」、つまり、これまでどおり官僚主義がはびこり、以前の慣習がたくなに残るだけだと不満を露わにした。トランプは、自分は普通の大統領にはならないといい、実際そのとおりになった。トランプ政権の多岐にわたる特徴をひとことであらわすならば「カオス」であろう。⁽⁸⁾トランプ政権がただよわせる、無作為で、「非線形」⁽⁹⁾で、矛盾に満ち、率直に言えば非常に混乱させる雰囲気から、手に負えない大統領という姿をイメージ

(※1) パーサー説…オバマ元大統領のアメリカ出生を疑い、大統領になる資格はないとする陰謀説。

(※2) ケムトレイル…飛行機雲にみせかけて生体攻撃のために撒かれているとされる人工有害物質のこと。

(※3) 非線形…カオス理論の重要概念のひとつ。もとは力学用語。線形系力学では力や変形が比例関係となるが、非線形系力学では比例関係がなく、より複雑な経過をたどりカオスを発生させることがある。

するのが大方の見方である。だが、かれの以前のキャリアに目を向けると別のことが浮かびあがってくる。「わたしはゆるくやることにしている」。巻頭から巻末までポジティブ・シンキングに満ちた自己啓発本『トランプ自伝』でトランプはこう語る。「あまりにガチガチに考えすぎると、想像力も起業家精神もなくなってしまうからだ。自分は毎日仕事に行き、どんな進展があったかだけをチェックするのを好む⁽⁹⁾」「時には少々ワイルドにならねばいけないときもある」とかれは告白する。トランプはつねに成功に自信をもっている。だが、問題が起きそうな状況では大胆に賭けに出る。「かれが動けばものごとはうまくいく⁽¹⁰⁾」。

トランプの直感に対する忠実さと「時が来たら迅速に決断して動ける」能力は、ものごとは本来、流動的で変わりやすいものであるというかれの認識と密接に関連している。この考えは、古代ギリシャの哲学者ヘラクレイトスや、カオス理論のような最近の科学的展開を特徴づける洞察につながるものがあり、ケイオス・マジックの基本ともなっている。⁽¹¹⁾「いかなるものも変化しうる。警告もなしに」。トランプはそう信じている。「それが、わたしが起きていることが何であつても深刻に取りすぎないようにしている理由だ⁽¹²⁾」。

トランプがものごとを深刻に考えすぎないことは、深夜の数多くの格言ツイートやつじつまの合わないインタビュー対応からもみてとれる。その様子をみてみると、あたかも「真理」や「現実」という言葉ほど、ものごとフレキシブルな見方を与えるものはないかのように感じられる。もし、あるケイオス・マジシャンがいうように、ケイオス・マジックにとって「現実とは遊び場のようなもの」であり、虚構世界の「カオス理論家たち」が一時的に現実とみなすようなものにすぎないのであれば、トランプのしばしば常軌を逸する声明は、かれにとつてもまた、現実とはある種の遊び場なのではないかという印象を与える。もうひとつ興味深いことに、ケイオス・マジックはニューソートと同じく、結果や「ものごとを実現する」ことに関心をもっている。ケイオス・マジックは、「ちよつと前までその人の脳内でまったく可能性としてとられな

ったことを、実際に起こせるのだと、魔術師が目に見えるかたちで証明できる結果」を追求する⁽¹³⁾。候補者を政権に送りこむのもそのひとつかもしれない。これは「達成可能な現実の境界線の変更」と呼ばれるが、現実創造への欲望を表現するまた別の言い方にも思える。

トランプとケイオス・マジックのもうひとつの共通点は、「ポストモダニズム」の産物であるということだ。トランプは実際、初の「ポストモダン大統領」であるが、ケイオス・マジックもまた同じ意味で、ある種の「ポストモダンのオカルティズム」なのである⁽¹⁴⁾。

ポストモダニズムは20世紀に発展した哲学的観点である。その源流となったのは、フリードリヒ・ニーチェやマルティン・ハイデガーなどの哲学の先人たちであるが、この両者とも、不変で「客観的な」真実という、わたしたちの日常生活や科学で使われる概念を切り捨てている。ポストモダニズムの本質をシンプルにまとめると——この思想は自身に「本質」があるということ自体否定するだろうが——「何でもあり」というフレーズに要約できるだろう。

ポストモダニズムにとって、近代世界をつくった科学的・合理的な確実性は、たとえば真理などの伝統的価値観と同じく、もはや妥当な考えではない。すくなくとも、わたしたちが思うより、それらの概念の確実性はずっと低いととらえられる。ポストモダニズムは「ポスト・トゥルース」⁽¹⁵⁾が政治の流行語になるずっと前から、それが何かを熟知し、その状況に付随する「代替的事実」や「フェイク・ニュース」についても

オルタナティブ・ファクト

(＊4) ポスト・トゥルース (post-truth) : 「真実以降」の意。客観的事実よりも個人の信条や感情が世論形成に影響を与える

状況を指す。トランプ大統領誕生などの大変動がつづいた2016年以降、注目を集めた概念。

意識的だった。ポストモダニズムや脱構築主義などの関連諸派は、もしかすると、西洋人の意識を覆いつくす認識論的懷疑論への道を敷いたとさえいえるかもしれない。トランプはそうした状況を駆使して利を得ている。歪曲しやすく、柔軟で、相対的なものに希薄化された「真実」の概念は、形而上学の高みからしたたり落ち、ポール・リクールがいうところの「懷疑の解釈学」を大衆意識に蔓延させた。これはわたしたちの日常生活で当たり前になった冷笑的な虚無主義ニヒリズムの一種であり、1世紀以上も前にニーチェが予言したことが現実化しつつあった。こうして陰謀論がはびこるいまの世界ができ、トランプ自身もそれに貢献している。アサシン教団と呼ばれた中世イスラム・イスマール派の長「山の老人」ハサン・ビン・サッバーフの格言とされる「真実は存在せず、すべてが許される」は、ポストモダニズムには所与の事実とみなされている⁽¹⁵⁾。そしてそれはケイオス・マジックにおいても同様である。

トランプの選挙戦の過程で発信された投稿や新聞記事を読むなかで、わたしたちが関わっているのは明らかに普通の事態ではないということを示すめざましい事例があった。トランプの選挙によって、政治世界がわたしたちを巻き込みながら非常に奇妙な方向に急転回してしまったことの最も明らかな徴候、それは『ニューヨーク・タイムズ』紙の記事だった。その記事は、トランプの首席戦略官であり、当時、アメリカ国家安全保障会議（NSC）のメンバーだったステイブ・バノン⁽¹⁶⁾は、20世紀イタリアのオカルティストであり秘教哲学者であったユリウス・エヴォラの信奉者であると報じていた。『ニューヨーク・タイムズ』がエヴォラについて言及するとはまったくの驚きだった。わたしが考えるに、アメリカ合衆国第45代大統領というコンテクストでそう報じたことがゲームの境目を分けた。

「男爵」^{パロン}ユリウス・エヴォラ。聖杯伝説や錬金術やそのほかの奥義に関する数々の書籍の著者であるこの人

物は、「トラディショナルリズム」として知られる秘教哲学の一派に属する。この思想は20世紀初頭にフランスの碩学、ルネ・ゲノンによる研究からはじまった。トラディショナルリズムは、宗教史学者のミルチャ・エリアーデ、哲学者のヒューストン・スミスやヤコブ・ニードルマン、古典的名作『スモールイズビューティフル』著者である経済学者E・F・シューマッハなどの、尊敬を集める知識人たちに影響を与えてきた。トラディショナルリズムの中心的テーマは、古に現実世界の真理を示す原初の啓示が人類にもたらされ、そこからすべての主要な宗教が興ったというものである。原初の啓示が下された黄金期以降、すくなくとも西洋では、人類は退廃の道に堕ちていった。わたしたちの近代世界は、その失墜の過程のなかでも最も暗く、最もどん底のステージにある。ゲノンとエヴォラが繰り返し指摘したように、わたしたちはヒンドゥー教の伝統という「カリ・ユガ」、もしくは古代ギリシャ人のいう「鉄の時代」——黄金、銀、銅の各時代がすぎたあとの最も墮落した時代——のさなかにいる。

近代世界はエヴォラに強い反感を抱かせ——ゲノンはそうしたことにはかかずらわなかった——近代に對抗するためにエヴォラは独自の闘争的トラディショナルリズムを展開した。1974年のエヴォラの死後、かれの「戦士」的スタイルのトラディショナルリズムは、極右政治勢力の奇妙な変種に活気を与えることになった。その勢力は、エヴォラが嫌悪した近代の自由主義文明の打倒を目指していた。エヴォラは秘教学と政治学をミックスした興味深い経歴のもち主だった。かれはまずはムッソリーニ、つづいてヒトラーに接近した。こんなに、秘教学的の傾向をもつ政治的右派を自任する読者たちによって、死後に自分がリバイバルされたことをエヴォラは喜んでのことだろう。説得的かつ理路整然とした知性的なかれの文章と、洗練された貴族的イメージ——片眼鏡を誇らしげにかけた写真が残っている——によって、「時代遅れのスキンヘッド人種主義者」と一線を画す思想を提供してくれる「知識人」。エヴォラはオルタナ右翼からそのような人物とし

て歓迎されている。⁽¹⁷⁾

幅広い知識をもつ秘教研究者であり実践者だったエヴォラは、1920年代、『UR』というオカルト雑誌を編集し、数々の魔術的テーマに焦点を当てた。エヴォラ自身も『UR』にペンネームで多数寄稿している。かれが定期的に立ち返った主題のひとつに、心の力だけで現実を変え、という魔術師の能力があった。前述のとおり、これはニューソートとケイオス・マジックの双方が関心をもつテーマだ。エヴォラにとって魔術師の目的とは、自分自身のパワーである「意志」の力を発達させることだった。魔術師は自分が望むとおりに世界を改造するためにその力を発揮することができるのだ。

トランプの近しい助言者であるバノンやオルタナ右翼たちがエヴォラの読者であることだけでも十分に興味深い。だが、次のことを知るとき、事態はより好奇心をそそるものとなる。実は、エヴォラの存在が広まったのは、バノンが超保守派ウェブサイト「ブライトバート・ドットコム」にいたときにオルタナ右翼たちに提供した「プラットフォーム」をとおしてのことだった。オルタナ右翼はこのサイトを通じてミーム・マジックを拡散することができた。リチャード・スペンサーはそれがトランプを「意志の力で」政権に送りこむための後押しになったと信じた。

このどんどん拡大するコネクションの網を理解しようと試みると、その糸は放射状に広がって、ほかの開ともつながり、さらに奇妙な状況を浮かびあがらせた。その一部は東に向かった。すこし前に『フォーティアン・タイムズ』^(*)で読んだいくつかの記事が記憶に残っている。それはロシア大統領ウラジーミル・プーチンがある時期展開した奇妙なポストモダン政治についてのものだった。ロシアはサイバー攻撃を通じてアメリカ大統領選に影響をおよぼそうとしたという説があるが、結論をいえば、これは決して単なる被害妄想

ではない。これらの記事を読み返し、数時間ネットで調査してみても衝撃を受けたが、トランプとその周囲の人びとは、プーチンがここ何年かいそしんでいた、ある種のポストモダン政治への巻き返しを図っていたのだ。トランプとロシアとの明らかに親密なつながりを考えると、トランプはプーチンから着想を得ていたとさえいえるかもしれない。トランプが有権者たちの現実感覚の切りくずしを狙ったワンマンショーを繰り広げているようにみえる一方、プーチンは勤勉な「政治工学者たち」のチームを立ち上げていた。かれはさまざまなメディアを使って、自分の臣民を電子のパンとサーカスで楽しませ、愛国的なナショナリストたちの感情を煽動しつづけるために、独自の現実を創りだそうとしていた。⁽¹⁸⁾トランプがエヴォラの名に言及するステイブ・バノンを助言者としてるように、プーチンもかれ専属のトラディショナルリストを従えている。地政学者の碩学、アレクサンドル・ドゥーギンだ。

10代で反ソビエト体制派としてスタートを切り、現在では支配層に身を置くドゥーギンもまた、エヴォラに関心を寄せている。ドゥーギンはまるでイデオロギーの早変わり師のようだ。国民社会主義やファシズムといった政治イデオロギーを取り入れては棄てていく。ポストモダンのアートや建築がさまざまな様式の詰め合わせからえり好みするのと同じように、多種多様なイデオロギーをミックスするのだ。イデオロギーに対するドゥーギンのアプローチは、ある意味「レゴ」のようだ。さまざまなブロックを外して、いろいろな方法でくつつける。ここにはちよつとハイデガーを足して、あそこには少々ニーチェを、というふうなのだ。これはケイオス・マジシャンたちがさまざまな信仰や信条を利用するのにたいへん似ている。かれらはそれらの信仰や信条を真剣にとらえず、あくまで結果を導くための「ツール」として活用する。ドゥーギンのケ

(＊5) 『フォーティアン・タイムズ』…世界の超常現象やびつくりニュースを掲載するイギリスの月刊誌。

イオス・マジックへの執心ぶりを知ったとき、それは予期された驚きとでもいうべきものだった。なぜ「予期された驚き」なのかというと、こうして奇怪なトンネルをくぐっていくうちに、もう何が起こるかあらかじめ予想がつくようになっていたからである。

そのひとつの例が、このような状況におけるヨーロッパ連合（EU）の立ち位置である。多くの人がブルグジット「イギリスのEUからの脱退」をトランプの選挙の前座とみなし、イギリスやヨーロッパのナショナリストたちは、かれらが待ち望んでいたことが叶いつつある兆しとして好意的にとらえた。ロンドン在住のアメリカ人であるわたしには、イギリスにおけるナショナリズムの高まりが如実に感じられた。同じくロンドンに住むヨーロッパ人の知人たちもそう感じていた。イギリスやヨーロッパ大陸の多くのナショナリストたちにとって、EUはグローバリズムの手先であり、資本主義エリートたち——主にアメリカ人の——が世界を巨大ショッピングモールに変え、異なるバックグラウンドや文化をもつ諸民族を単なる面白みのない消費者の一群にしてしまう際の道具とみなされている。こうして昨今の「アイデンティティ政治」が生まれることになるのだが、それはイデオロギーや経済ではなく、大量移民やグローバル消費主義による国民アイデンティティの喪失に対する怖れに駆り立てられている。ロシアもまたEUについてはよく思っておらず（2014年のウクライナ、クリミアでの騒乱もそれゆえである）、ドゥーギンのグローバリゼーションについての発言はしばしばヒステリーと紙一重となる。

トランプは「アメリカ第一」を訴えた就任演説で、孤立政策を明言し、世界の警察官としてのアメリカの役割に終止符を打った——もっとも、のちの展開からは、トランプの考えの変化がうかがわれる。すると今度はEUが、第2次世界大戦の混乱後に出現した新世界秩序の最後の生き残りであり、ヨーロッパの平和と

安定を維持してきたとして、一部でもち上げられることになった。この説には何やら聞き覚えがある。拙著『政治とオカルト』に戻ろう。

たしかこうした展開に関連することを書いていたはずだ。その記憶は正しかった。この本のなかでわたしは、EU自身のルーツが一種のオカルト政治、すなわち「シナルキー」(synachy)と呼ばれる奇妙な秘教的社会政治運動にあると考えられる理由について書いていた。

シナルキーは、アレクサンドル・サン＝テューヴ・ダルヴェイドルという19世紀フランスのミステリアスなオカルティストの難解な著書によって世に知られるようになった。シナルキーとはアナキー(無政府)の対義語で「総合政府」(total government)を意味する。すくなくともいくつかの報告によると、第1次世界大戦にいたるまでの大衆時代後の1930～40年代、シナルキー運動は密かにフランス政府の中枢まで到達していた。シナルキーは、ルーブル美術館中庭のピラミッドやパリ近郊のラ・デファンスの高層ビル「グランドルシュ」の奇妙な「スター・ゲート」などを生み出した、パリの新たな「心理地理学」の黒幕だった可能性さえある。シナルキーの目的は、ある種の「ヨーロッパ合衆国」だ。シナルキーについて書いた人びとの一部は、それはEUの基盤に横たわるこの思想の繰り返し——もしかすると繰り返し以上のもの——であることをほのめかした。

シナルキーは、ユリウス・エヴォラにインスピレーションを与えたトラディショナルリズムの根底にある「最初の啓示」と同様のビジョンから影響を受けている。エヴォラの思想は、つねにかれがそうであったように、権力の回廊における居場所を追求していた。シナルキーの文脈で思い浮かぶのは、孤高のエジプト学者であり秘教哲学者であるルネ・シュヴァレ・ド・リュビッツの名前だ。スフィンクスの真の建造年代についてのかれの考察は、グラハム・ハンコックなどのベストセラー作家たちを通じて、オルタナティブな「古

代文明」文学ジャンル全体にインスピレーションを与えた。シュヴァレ・ド・リュビッツは若いころ、ゲノンが親しんでいたパリのオカルト・サークルに入っていたことがあり、トラディショナルリズムとシナルキークの両方がそこで誕生することとなった。

極右的な魔術思想はアメリカとロシアで実際に作動しているのだろうか。新世界秩序の最後の砦である秘教由来のEUは、両者のあいだで果敢にもちこたえることができるのか。わたし自身は陰謀思考ではないが、つづく部分では陰謀論意識が大きな役割を果たす。だが、これまでの議論や関連情報を眺めると、どうも迷いが生じてしまう。「秩序」陣営と「カオス」陣営は、世界の政治地図を変え、魔術戦に向かおうとしているのか。何らかのオカルト戦がいま、もしくはこれからはじまろうとしているのだろうか。エヴォラやルドルフ・シュタイナーのような秘教思想家たちはそうだと考えていたようだ。もしそうなら終末のときは近いのか。

ステイプ・バノンとアレクサンドル・ドゥーギンは、いずれも来るべき決戦について終末的ヴィジョンをもっている。そのヴィジョンを現実のものとしてできる人びとに、両者の主張に耳を傾ける用意があることを考えれば、そう尋ねてみたくもなる。わたしたちの「ポスト・トゥルース」時代において、いかに現実が融通のきくものになったかを考えると、これは実に身震いするような考えだ。もしミーム・マジックがだれかをホワイトハウスに送りこむことができたのであれば、そのほかにはどんなことが可能なだろう。ポジティブ・シンキングも実際に効力があるのだろうか。このような状況においてそれはどのような役割を果たし、どの側につくのか。そしてわたしたちはそれに対して何ができるのか。

これから本書でお伝えしていくのは、こんにちの世界でおこなわれているオカルト政治についての暫定的

レポートである。まだ公開されていない出来事もあることを考えると、それらが明らかにするときにはだいぶ事情が変わってはくるだろう。現在の出来事について書くとき、作品が読者に届く際にはすでに時機を逸したのになってしまいうリスクはつねにある。近年では変化が起こる速度も上がっている。それはケイオス・マジックやポストモダンリズムも例外ではない。「われわれは急速に変わりゆく世界に住んでいる」とケイオス・マジックの創始者のひとりは書いている。一部の人には理解できないかもしれないが、ケイオス・マジシャンたちは「日々の生活の加速する変化と分裂に心から落ち着く」のである。それはポストモダンストやトランプにも共有される感情であろう。わたしは、友人や連絡を取っている人びとから新たな情報や資料が来るたびに圧倒された。ある場所からほかへのつながりが終わりなき連鎖をかたちづくるかのようだった。だが、もし自分のメッセージを伝えたいと思うなら、ある時点で著者は調査の手を止め、スクリーンに点を描いていかなければならない。

本書のタイトルが示すように、こんにちのオカルト政治は魔術と〈力／権力〉¹⁾におおいに関係している。これらは魔術師と政治家の双方にとつての関心事だ。この両者は隣人ではないにしろ、わたしたちが考えるよりも共通点がある。魔術師も政治家のどちらも関心をもつこと、それは明らかにパワーだ。ポジティブ・シンキングのパワーもちろんだし、他者へおよぼすパワーもまた然りである。

政治的リーダーにはグル（導師）などの霊的指導者たちとどこか共通する特徴がある。政治的リーダーとグルと魔術師との垣根はしばしば曖昧である。たとえばアレクスター・クロウリーは魔術師でもありグルでもあった。かれは人びとに「真の意志」を発見する方法を教えるとともに、政治的影響力も行使しようとした。弟子に支配力をおよぼすグルは、カリスマ的リーダーが国家に対しておこなうことを小規模に実施している。どちらの場合でも、制御不能になったパワーはグルと弟子の双方を傷つけかねない。より大きな政治

の舞台では、戦争や国家崩壊をもたらす可能性すらある。この「指導したい」という奇妙な欲求、そして同じくらい奇妙な「従いたい」という欲求はいったい何か。この力への意志とは何なのか。なぜわたしたちはそれを追求するのか。力はつねに墮落する定めなのか。カリスマ的リーダーは魔術師が魔法をかけるようにみずからの信奉者たちに呪文をかける。いずれの場合でも、大胆不敵な詐欺師のように、魅惑的で自信に満ちたイメージのパワーがはたらく。伝統的な形態でも新たな電子的形態でも、そこで媒体となるのは「想像力^{イマジネーション}」である。

もし想像力が単に「虚構」であり、手に負えない現実の架空の代用物であるならば、わたしたちは自身を守るために適切な手段をとり、「ポジティブ・シンキング」をナンセンスなものとして無視することもできる。だが、魔術師たちが何世紀ものあいだ訴えてきたように、もし現実がそれほど手に負えないものではなく、想像力が「実際に現実を創る」ものであったとしたらどうか。もしポジティブ・シンキングが実際に力をもつとしたら？

政治とオカルトの結びつきは一見、奇妙に思えるかもしれない。しかし、ポスト・トゥルース世界において、もはや奇妙なことなどあるだろうか。もしこんなにちの現実がだれにでも入手可能なものであるならば、ほかのだれかがやる前にわたしたちがこの手につかんでおくべきではないだろうか。まずは地平線に目を向け、どのような「暗き星たち^{ダークスターズ}」が視野に入るかみてみよう。

第1章

「勝つのはわたしだ」

2016年アメリカ合衆国大統領選挙での大富豪ドナルド・J・トランプの勝利は、多くの人に驚きをもって迎えられたが、かれ自身にとっては必ずしもそうではなかった。「勝つのはわたしだ」。トランプは選挙活動のあいだ一貫してそういういつづけ、どうやらそのとおりの結果になったようだ。「勝利」はトランプにとって重要なことだ。すくなくらずの解説者が指摘するように、トランプにとって唯一の重大事は勝利であるといっても過言ではない。トランプによる自己啓発書『トランプ自伝』は、読者をかれと同じく勝者に導くための一冊となっている。トランプはそのなかでこう語る。「わたしは負けず嫌いで、勝つためには法の許す範囲ならほとんど何でもすることを隠しはしない」⁽¹⁾。トランプを知るほとんどの人がこの自己評価に同意するだろう。もつとも、成功のために必要であれば、トランプはその許容範囲を少々広げることも厭わないだろうと疑う向きもあるかもしれない。

だが、ビジネスはかれの一面にすぎない。もうひとつの側面とはもちろん「政治」である。トランプの勝利は激震をもたらし、政治有識者たちはこの予想外の混乱の理由をあれこれ推理した。白人中産階級の不満、ロシアの介入、ヒラリー・クリントンの悪評等々が分析の手がかりとされた。だが、トランプの台頭に確実に貢献したのは、ポジティブなセルフイメージ、そして、かれがサポーターたちに繰り返し伝えた、自分こ



図1 大統領就任式で宣誓をするトランプ

そが勝者であり、望むものを手にするのだという確信であつたにちがいない。トランプは読者にこう説く。「人は自分では大きく考えないかもしれない」。「だが、大きな考えをもつ人には興奮する」⁽²⁾。

トランプはそれが可能な人物のひとりだ。かれの考えは大きい。かれの辞書に小さいという言葉はない。⁽³⁾トランプタワーから、世界一高いビルの建造計画（中止になったが）や、巨大なアトランティックシティ・カジノまで。トランプが手がけるあらゆるものは実際スケールが大きい。これらの事業は、「自分の存在を打ち出し……記念碑的なものを建設し」、かれが「大きな挑戦」と呼ぶものに臨みたいという、トランプが若いころから抱いてきた欲望に突き動かされている。⁽⁴⁾

このうんざりするほどの自信、成功への揺らがぬ確信、凡庸なその他大勢から抜きん出ることへの強い欲求は、どのように説明できるだろうか。ナルシズム、誇大妄想、利己主義、自己中心主義、他者への無神経……さまざまな性格的特徴がトランプの不動の楽観主義と自己信頼に対する説明にあてられてきた。正確に言えば、トランプの心理的プロフィールはこれらすべてを含むと同時にそれ以上のものである。後述するように、わたしはコリン・ウィルソンがいうところの「ライトマン」(Right Man)としての印象をトランプに感じている。「ライトマン」とは、いかなる状況においても誤りを認めず、自分の道を貫くためなら何事も厭わない人間のことだ。⁽⁵⁾だが、トランプの勝利にともない、ニュース報道や記事、投稿、ツイートが大騒ぎになるなかで、トランプの止まることのないハイテンションな態度の説明となりそうなことが、かれの大量のサウンドバイト「報道用の抜粋映像」から浮かび上がり、わたしの注意を引いた。いく

引き寄せの法則…………… 61, 62, 72, 302
ヒンドゥー…………… 12, 21, 38, 49, 78, 85, 87,
96, 135, 181, 187, 198, 217
ファシズム…………… 23, 99, 171, 173-7, 190-2,
204-12, 217, 241, 243, 260, 273, 276, 281
フォーチャン
4chan…………… 147-53, 158-60, 162, 163,
233, 234, 241, 246
普遍精神…………… 39, 52, 53, 57, 82
ブライトバート・ドットコム
…………… 22, 137, 144, 159, 167, 169
ブラグマティズム…………… 40-1, 61, 90-1
フリーメイソン…………… 145, 178, 186
ブレクジット(イギリスのEU離脱)
…………… 24, 185, 229, 262, 305
ヘルメス主義…………… 39-40, 52, 55, 71-2, 74,
75, 78, 82, 194, 195, 286
ポジティブ・シンキング…………… 13-4, 16-7, 18,
26, 27, 28, 31-4, 43-4, 45, 53, 59, 61, 63-73,
83, 91, 96-7, 107, 132, 133, 203, 262, 287,
289, 290, 293, 294, 302, 305
保守主義…………… 137, 138, 140-4, 164-70,
172, 173, 226, 273
ポストトゥルース…………… 19, 26, 28, 65, 90,
103, 132, 142, 145, 150, 216, 219, 222, 225,
281, 288, 291, 296, 297

ま

マルタン会…………… 180, 185, 188
ミーム…………… 14-6, 22, 26, 88, 93, 108, 136,
141, 144, 146-7, 151-3, 169, 204, 246, 262,
266, 270, 286, 289, 290, 293, 296
未来派…………… 150, 199, 200, 212
メスメリズム…………… 49-52, 61, 70, 85, 256, 301-2
メンタル・サイエンス
…………… 13, 31, 34, 55, 61, 69, 73

や

有機的国家／有機的社会…………… 180-1,
205, 208, 216-7, 249, 250, 278, 280-1

ユーラシア主義
…………… 238, 247-61, 262-86, 305
ユーラシア青年連合(EYU)
…………… 266-7, 269, 275

ら

ライトマン／ライトウーマン…………… 30, 110-2,
114, 121, 125, 128-9, 172, 295
陸対海の戦い…………… 248-9
リパタリアニズム…………… 124, 150
ロシア宇宙主義…………… 256-7
ロシア正教…………… 72, 242, 257, 270

U

UR…………… 22, 197, 202, 204-5, 272

…… 24, 89, 218, 227, 274, 277, 278, 279
 人格形成 …… 57-9
 シンクロシティ
 …… 16, 95, 151, 153, 157, 161
 神智学 …… 11-2, 35, 39, 55, 145, 179, 185,
 189, 229, 251
 新プラトン主義 …… 78, 194, 195, 285
 心靈主義 …… 40-1, 59, 156-7, 185, 187
 スヴェンガーリ …… 70-1, 241
 スーフィー …… 115, 187
 成功の法則 …… 59-60, 70
 青年運動
 …… 145, 171, 175-6, 228, 247, 266-7, 275
 セックス・ピストルズ …… 91
 想像力
 …… 13, 28, 56, 154, 157, 179, 201, 293-6
 ———と意識 …… 292
 ———と神 …… 39-40, 75-6, 80-1
 ———と身体 …… 44-6
 ———とケイオス・マジック …… 85-7, 96
 ———と創造 …… 78-9
 ———と魔術 …… 151
 ———の現代における欠如 …… 287-9
 ———のパワー …… 13, 39-40, 44-6, 75-6
 真の—— …… 287-9, 292
 全体主義 …… 130, 177, 180, 205, 214,
 225, 276, 278
 千年王国 …… 210, 248, 273, 279, 281

た

大恐慌 …… 66, 67, 70
 対抗文化 …… 89, 212, 246
 大西洋主義
 …… 238, 247-9, 259, 265-6, 268, 278
 太陽族／月族 …… 217-8, 238, 249, 260
 タダ …… 88-9, 150, 200, 246
 タナテロス啓明結社 (IOT) …… 91-2
 地政学 …… 23, 236, 238, 249, 259-60, 264,
 266, 268, 271, 272
 超越主義 …… 36-40, 41

デブロラブルズ …… 153
 デマゴグ
 …… 98-135, 136, 203, 230, 241, 277
 トウルパ …… 154-8, 222, 262, 290, 293
 突撃隊 (SA) …… 191-2, 208
 トラディショナリズム …… 20-2, 23, 25-6,
 84-5, 92, 94, 114-7, 173-212, 213-9, 258,
 276, 278, 279, 284, 296

な

ナーシ (友軍) …… 228
 ナショナル・ポリシー・インスティテュート (NPI)
 …… 13-4, 136
 ナチス …… 140, 142-3, 145, 157, 191, 192,
 207-9, 241, 300
 ニザー・ニザー
 …… 87, 88, 94, 95, 161, 182, 280
 ニューソート …… 13-4, 18, 22, 31-83, 90,
 94, 95, 96, 97, 98, 107, 121, 123, 134, 145,
 161, 197, 200, 202, 230, 237, 272, 286, 287,
 289, 292, 293, 294, 295, 298, 301, 303
 ノースフィア …… 229-30, 232, 257-8
 ノウス …… 39, 52, 75

は

バイオスフィア2 …… 164, 172, 257-8
 白人主義 …… 14, 29, 136-46, 169, 170
 情熱性 …… 255-6, 258, 259
 薔薇十字 …… 11, 74, 179
 パワー (力／権力) …… 27-8, 177, 264
 ———への意志 …… 112-3, 197, 295
 ———とエグリゴル …… 154
 ———とゲル／デマゴグ
 …… 103-13, 117, 134
 ———と個人 …… 148, 202-4
 繁栄の福音 …… 58-62, 64, 68, 133
 パンク …… 91, 93, 96, 107, 166, 223, 236, 247
 反セム主義 …… 136, 140, 141, 142, 148,
 189, 207, 209, 242, 244

◆事項索引

あ

アストラル ……15, 49, 74, 85, 86, 156-7, 171, 180, 182-3
アーリア ……12, 145, 182, 192, 207, 215, 216, 241, 247, 272
イスラム ……20, 170, 171, 173, 187, 240, 245
陰謀論 ……16, 17, 26, 89, 128, 137, 139, 142-3, 159, 168, 179, 230, 240, 244, 259, 263, 264, 270, 304
永遠の哲学 ……177, 194-5
オルタナ右翼 ……14-6, 17, 21, 22, 136-72, 173-4, 175, 204, 208, 213, 243, 246, 263, 270, 286
オルタナティブ・ファクト
代替の事実
……………132, 142, 219, 222, 225, 286, 297
アガルタ ……180-3, 196, 217, 251
アナキー ……25, 91, 180, 183, 187
アノニマス ……149-50, 233, 246
ヴァジュアライゼーション
……………13, 34, 53, 55, 69, 72, 296
ウクライナ危機
……………24, 231-5, 237, 238, 240, 253, 270-2
エグリゴル ……154-7, 262, 293
エスノイ ……255-6, 258-9, 266
エンライトン・ネクスト ……117-21
オブジェクトビズム ……122-7
オリガルヒ ……220, 221, 223, 224, 225

か

カースト制 ……176, 180, 191, 192, 193, 196, 198, 206, 217, 218, 283
カエルのペペ ……16, 146-7, 152-63, 203, 262, 270, 286
カリスマ的リーダー ……27-8, 101-9, 110-1, 125, 131, 133, 146, 153, 163, 290
カリ・ユガ ……21, 182, 186, 195, 211, 212

クトゥルフ ……88, 89, 158, 159, 235
グノーシス ……35, 78, 82, 141, 186, 279
クリスチャン・サイエンス ……53-5, 61, 301
グル ……27-8, 70, 93, 98-135, 136, 190, 203, 230, 241, 255, 277, 295
グローバリゼーション
……………24, 214, 259, 265, 274-5, 278
ケイオス・マジック ……15-9, 20, 22, 23, 27, 42, 44, 73, 81, 83-97, 98, 104, 106-7, 123, 131, 132, 133, 134, 136, 138, 141, 148, 161, 162, 168, 197, 200, 201, 202, 203, 204, 205, 216, 219, 226, 237, 239, 271, 276, 280, 287, 288, 289, 292, 293, 294, 301
ケック
KEK ……158-62
原初の啓示
……………21, 25, 85, 177, 194-5, 216, 217
交霊会 ……40, 74, 156, 185, 240
国民社会主義 ……12, 23, 99, 105-6, 145, 157, 167, 192, 207, 237, 260, 273, 276, 279, 280, 286
国民戦線 ……173, 186, 212
国民ポリシェヴィキ党 (NBP) ……245-7

さ

サイエントロジー ……109, 149-50, 246
催眠 ……46, 49-51, 68, 70, 71, 230
ザ・コレクティブ ……124-7, 216
自己改善 ……31, 56-7, 59, 68, 70, 80, 98
自助 ……31, 44, 45, 98, 133
シジル (印形) ……87, 162, 237, 246, 286
シチュアシオニスト ……92, 93, 108, 150
ジー・テンプル・オブ・サイキック・ユース (TOPY) ……93
シナルキー ……25-6, 180-6, 189, 191, 196, 205, 208, 217, 230, 236, 281
自由主義
……………21, 142, 159, 214, 226, 273-6, 277
終末思想 ……26, 164, 166, 230, 237, 238-9, 252, 273, 278-86, 299
消費主義

プーチン、ウラジーミル …… 22-3, 92, 137,
 139, 164, 173, 174, 185, 219-35, 236, 238,
 253, 260-1, 264, 266-71, 280, 297, 305
 フッサー、エトムント …… 35, 38, 287, 293
 プライトバート、アンドリュー …… 166-9, 244
 プラヴァツキー、ヘレナ・ペトロヴナ
 …… 11-2, 39, 54, 90, 156-7, 181
 ブラウン、ダレン …… 109
 フルカネリ …… 188
 ブレイク、ウィリアム
 …… 75-6, 78, 80, 179, 272, 278, 293
 プロハーノフ、アレクサンドル …… 244-5
 ヘーゲル、ゲオルグ・ヴィルヘルム・フリードリヒ
 …… 37, 38, 61, 274, 279
 ヘス、ルドルフ …… 191-2
 ヘッセ、ヘルマン …… 172, 215, 236, 275
 ヘルメス・トリスメギストス …… 39-40, 72, 194
 ホームズ、アーネスト
 …… 31, 56, 61, 62, 69-70, 75

ま

マズロー、アブラハム …… 101, 114, 131, 284
 マーフィー、ジョセフ …… 53, 62, 301
 マリネッティ、F・T …… 199, 204
 マルクス、カール
 …… 207, 211, 244, 263, 264, 271
 マルフォード、プレントイス …… 59-62, 64, 70
 ミランドラ、ピコ・デラ …… 195
 ムツォリーニ、ベニート …… 21, 99-101, 104,
 105, 107-8, 109, 110, 125, 130, 133, 176-7,
 199, 204, 205, 206, 209, 210, 211, 212, 253
 メスマー、フランツ・アントン
 …… 49-50, 61, 70, 85, 256, 301, 302

や

ヤノプルス、マイロ …… 144, 145, 153, 159, 172
 ユング、C・G
 …… 16, 82, 101, 105, 151, 157, 229

ら

ライヒ、ヴィルヘルム …… 49, 256
 ラジニエーシ、バグワン・シュリ
 …… 106, 111, 115, 118
 ラヴクラフト、H・P …… 88, 89, 90, 159, 235
 ラングレン、ジェフリー …… 111
 ランド、アイン …… 122-7, 129, 201, 216
 リガルディ、イスラエル …… 74, 77, 81
 ルーズヴェルト、フランクリン・デラノ …… 67
 ル・ペン、マリーヌ …… 171, 173
 レヴィ、エリファス(コンスタン、アルフォンス・ルイ)
 …… 83-6, 87, 181, 195
 レーガン、ドナルド …… 33, 43, 141, 166
 レーニン、ウラジーミル …… 123, 263
 レグナリー、ウィリアム(2世) …… 142, 143

ジャコリオ、ルイ…………… 181-2
 シュヴァレ・ド・リュビッツ、ルネ
 …………… 25-6, 188-90, 192, 208
 シュオン、フリッチョフ…………… 114-7
 シュタイナー、ルドルフ
 …………… 26, 35, 37, 66, 201, 283-4, 285, 293
 シュティルナー、マックス…………… 201
 シュペングラー、オスヴァルト
 …………… 193, 208, 213-4, 238, 250, 259, 265
 シュミット、カール…………… 208, 249
 ショー、ジョージ・バーナード…………… 79-80, 82, 113
 ショーペンハウアー、アルトゥル
 …………… 79, 81, 82-3, 112, 200
 ジョルジャン、ジェイソン・レザ…………… 145-6
 ジョーンズ、アレックス
 …………… 137-8, 139, 153, 244
 ジョーンズ、ジム…………… 111, 113-4, 119
 ジリノフスキー、ウラジミール…………… 230, 231
 シン、フローレンス・スコヴェル…………… 61, 62, 71
 スヴェーデンボリ、エマヌエル
 …………… 51, 52, 59, 62, 70, 76, 272, 293, 302
 スタイナー、ジョージ…………… 294
 スターリン、ヨシフ…………… 111, 125, 130, 236, 253
 ストー、アンソニー
 …………… 102-3, 104, 106, 110, 111-2
 ストリンドベリ、アウグスト…………… 76-7
 スペア、オースティン・オスマン
 …………… 86-8, 90, 94, 95, 126, 272
 スペンサー、リチャード…………… 14, 16, 22, 136,
 138-9, 140-4, 145, 146, 163, 174, 246, 262,
 289
 スルコフ、ウラジスラフ…………… 221-9, 230, 231,
 232, 235, 236, 237, 238, 247, 260, 263, 265,
 270, 281, 282, 289
 ゼボッテンドルフ、ルドルフ…………… 192, 216
 ゴロトフ、ボリス…………… 230-1

た

デヴィッドニール、アレクサンドラ…………… 154-6
 デミル、セシル…………… 69

ドゥーギン、アレクサンドル…………… 23-4, 26, 92,
 139, 145, 164, 171, 173, 174, 185, 219, 234,
 236-49, 250, 251, 253, 259-61, 263-4, 265,
 266-86, 288, 289, 290, 291, 296, 298
 ドゥ・マ、ヴィヴィアン・ボステル…………… 189, 191-2
 トライン、ラルフ・ウォルドー
 …………… 57-9, 61, 71, 142
 ドリヴェ、アントワーズ・ファープル…………… 181

な

ニクソン、リチャード…………… 33, 67, 141
 ニーチェ、フリードリヒ…………… 19, 20, 23, 81, 82,
 101, 112-3, 140, 175, 215, 276, 279, 300

は

バーン、ロンダ…………… 13, 62
 ハイデガー、マルティン
 …………… 19, 23, 193, 237, 278-80, 282
 ハウスホーファー、カール…………… 249
 バノン、ステイブ…………… 20, 22, 23, 26, 137,
 163-72, 173-4, 176-7, 185, 229, 233, 235,
 257, 264, 269, 297
 バビュス(アンコース、ジェラルド)
 …………… 178, 179-80, 185, 186, 187, 188, 196
 ハンコック、グラハム…………… 25, 188
 ピール、ノーマン・ザインセント…………… 16-7, 31-3,
 61, 63-73, 74, 77, 81, 82, 83, 96, 132, 161,
 202, 272, 301, 302
 ヒトラー、アドルフ…………… 14, 21, 98-101, 103,
 104-6, 107, 108, 109, 110, 111, 119, 125,
 130, 132, 133, 138, 144, 145, 157, 167, 168,
 191, 192, 207, 208, 209, 210, 212, 215, 216,
 228, 240, 241, 246, 249, 253, 255, 260, 275,
 276, 280
 ヒムラー、ハインリヒ…………… 208, 212, 241, 246
 ヒル、ナポレオン…………… 31, 58, 61, 70
 フィチャーノ、マルシリオ…………… 194
 フィルモア、チャールズ…………… 31, 56, 61, 70
 フォーチュン、ダイアン…………… 156

◆人名索引

あ

アグリッパ、コルネリウス 46
麻原彰晃 111
アブドル 74-6, 117
アレン、ジェームズ 57, 61
アイエツ、W・B 77, 293
ヴァイニンガー、オットー 168, 207
ヴァイノ、アントン 229
ヴァンデンブルック、アンドレ 189-92
ヴィサリオ 230, 231
ウィルソン、コリン 30, 51, 76-7, 101-2,
110-1, 112, 113, 121, 294
ウェーバー、マックス 102, 103
ヴェルナツキー、ウラジミール 257-8, 281
エヴァンズ、ウォレン・フェルト 52-3, 55, 61
エヴォラ、ユリウス 20-3, 25, 26, 145,
173-7, 186, 188, 192, 197-212, 213-9, 237-
8, 240, 242, 243, 248-9, 258, 263, 264, 267,
272, 275, 276, 280, 284-5, 291, 293-4, 296,
298
エーコ、ウンベルト 11, 177
エディ、メリー・ペイカー 53-5, 56, 61, 69
エピクテトス 45, 65
エマーソン、ラルフ・ウォルドー
..... 36-7, 39, 40, 57, 61, 69, 295
エリアーデ、ミルチャ 21, 211
エリオット、T・S 193, 279
エリス、アルバート 68, 69
オーウェル、ジョージ
..... 100, 103, 226, 238, 255, 264, 265, 275
オリッジ、ジェネシス・P 93
オールコット、ブロンソン 39

か

カーネギー、アンドリュース 70, 122
カーネギー、デール 62, 70

カーライル、トーマス 37, 61
カント、イマヌエル 37-8, 61, 293
アトキンソン、ウィリアム・ウォーカー
..... 56, 61, 72
クインビー、フィニアス
..... 46-9, 50-2, 54, 61, 301-2
グミリオフ、レフ 253-6, 258-9, 266, 281
グラント、ケネス 87-8
クリントン、ヒラリー
..... 17, 29, 136-9, 153, 163, 264, 270
グルジェフ
..... 82, 90, 121, 251, 257, 258, 279
クロウリー、アレクスター 15, 27, 44, 74,
77, 86-7, 88, 89, 90, 93, 103, 107, 109, 124,
129, 134, 162, 201, 293
ゲーテ、ヨハン・ヴォルフガング・フォン
..... 35, 37, 77, 293
ケネディ、ジョン・F 33, 67
ゲーリング、ヘルマン 110, 216, 260
ゲッベルス、ヨーゼフ 108, 226
ゲノン、ルネ 21, 26, 115, 178-80, 185-9, 193-
4, 195-7, 198, 210, 213, 218, 240, 242, 258,
275, 280, 284
ゲブサー、ジャン 105, 157, 291
コーエン、アンドリュース 117-21
ゴダード、ネヴィル 61, 73-9, 80-3, 84,
87, 90, 94, 95, 96, 117, 161, 200, 201, 202,
272, 280
コルバン、アンリ 295-6
コールリッジ、サミュエル・テイラー
..... 37, 39-40, 61, 79, 80, 287-8, 292, 295
グローヴィン、イエフゲニイ 240-1

さ

サン＝ティエーヴ・ダルヴェイドル、アレクサンドル
..... 25, 180, 181-4, 186, 189, 191, 196, 217
サン＝マルタン、ルイ・クロード・ド 180
ジェイムズ、ウィリアムズ
..... 40-2, 47-9, 60, 61, 97, 98, 121, 295
ジーファース、ヴォルフラム 241

ゲイリー・ラックマン Gary Lachman

アメリカ合衆国ニュージャージー州生まれ。作家。意識、対抗文化、西洋秘教伝統について執筆・講演活動をおこなう。*The Return of Holy Russia, Beyond the Robot, The Secret Teachers of the Western World, Politics and the Occult*など著書多数。これまで複数の言語に翻訳されている。1996年からロンドン在住。ロックバンド「ブロンディ」の創設メンバーであり、2006年にロックの殿堂入りを果たす。本作が初の邦訳となる。

ウェブサイト: <https://garylachman.co.uk>

安田 隆 やすだ たかし

1957年、兵庫県生まれ。ミュージシャン(ドラマー)として活躍するかたわら、東洋の医術や武術、瞑想法などを習得。1990年、横浜市に「気の整体術研究会」を設立。その後、マインド・テクノロジー(NLP)、プロセス指向心理学(P.O.P.)、現代催眠など、西洋のさまざまな療法を研究し、東洋と西洋の叡智に共通する原理を発見する。これにより体・心の悩み、運命のトラブル等を同じように扱える数々の技法を編み出す。95年、気の整体術研究会を包括する組織「THE ARK COMPANYジ・アーク・カンパニー」を設立。現在にいたるまで心・身・神を統合した独自の研究をすすめている。世界中から相談に訪れる人びとに「現代のシャーマン」として指導にあたっている。

著書に『波動干渉と波動共鳴』(たま出版)、『誰にでもできる「気」のコツのコツ』(講談社+α文庫)、『奇跡の技法 アルケミア』(ヒカルランド)、『ジェムレーション』(ともはつよし社)など、多数。

THE ARK COMPANY

<http://the-ark-company.com/>

小澤祥子 おざわ さちこ

1980年、東京都生まれ。東京外国語大学アラビア語専攻卒業。編集・翻訳者。



トランプ時代の魔術とオカルトパワー

第一刷 2020年6月30日

著者 ゲイリー・ラックマン

監訳者 安田 隆

訳者 小澤祥子

発行人 石井健資

発行所 株式会社ヒカルランド

〒162-0821 東京都新宿区津久戸町3-11 TH1ビル6F

電話 03-6265-0852 ファックス 03-6265-0853

<http://www.hikariland.co.jp> info@hikariland.co.jp

振替 00180-8496587

本文・カバー・製本

DTP 株式会社キヤップス

編集担当 小澤祥子

落丁・乱丁はお取替いたします。無断転載・複製を禁じます。
©2020 Yasuda Takashi, Ozawa Sachiko Printed in Japan
ISBN978-4-86471-879-0